



園だより 11月号

新宿区立西戸山幼稚園 令和7年10月31日発

カマキリと「くねぴー」

園長 佐藤 淳穂

Aさんが、園庭をスタスタと歩くカマキリを見つけて大声を上げました。Bさんはカマキリを捕まえようとしませんが、立派なカマを振り上げられると出した手も引っ込んでしまいます。この英雄を取り囲んでドキドキ、わくわくがしばらく続きましたが、どうしても離れがたい様子で飼育ケースに入れて飼うことになりました。

翌日、Cさんが「触りたい」と言ってカマキリをケースから出しました。Cさんがカマキリを指でつかんだその時です。「なんか出てきた！」Dさんが叫びました。カマキリのお尻から黒いものがにゅるにゅると現れたのです。カマキリの腹部に寄生するハリガネムシです。ハリガネムシはCさんに持たれたままのカマキリの体内から出続けて、地面に落ちました。20センチくらいあります。「水に入れないと死んじゃう！」去年のこの時期にもハリガネムシに遭遇していて、子どもたちはハリガネムシが水中の生き物だと知っていました。

去年のハリガネムシはあっという間に動かなくなっていました。ハリガネムシは水中で交尾をするためにカマキリを洗脳して水辺に誘うということを後から知りました。Cさん、Dさんは、年長組になって再びこの黒くて長い謎の生物に出会ったわけです。今回はすぐに池の水を入れたケースにハリガネムシを入れました。さあ、ハリガネムシの観察が始まりました。

水の中でハリガネムシはくねくねと動き、顔なのかお尻なのか先端を水面から出すこともあって目が離せませんでした。時間が経つと、ハリガネムシは長い体をくるくると何重にも巻いて子どもの指輪サイズのリング状になりました。「死んじゃったのかな…」と誰もが思いました。



次の朝、CさんとDさんがリング状になっているハリガネムシを心配そうに見ていました。Dさんが「動いた！」と言うので、気のせいでしょうと思いましたが、確かに少し揺れている様子でした。二人は「声が聞こえたのかもしれない」とハリガネムシに呼びかけ、掛け声はリズムを帯びて歌のようになりました。子どもらしい応援ソングを遠くで聞いていましたが、そのうちにハリガネムシに名前が付いたと教えてくれました。見るとケースに「くねぴー」というカードが張り付けてありました。「くねぴー」はすっかり体を伸ばしてくねくねと動いていました。瓶に入れて標本のように保管してある去年のハリガネムシも、水に入れて応援してもらっていたら生き続けたかもしれません。

先日、「園庭大改造」著者で庭師の小泉昭男氏が「害虫という虫はいない。人間が自分の都合でそう呼んでいるだけだ。」と話していました。研ぎ澄まされた感性で先入観なくあらゆるものに出会っている子どもたちは、すべての自然に対しても平等です。カマキリもハリガネムシも懸命に生きている「共生」について子どもたちの姿から考える毎日です。